

平成30年度
地球環境『自然学』講座
第16回

テーマ

神宿る宗像の海づくり
「海の鎮守の森プロジェクト」の挑戦

講師

宗像鯨の会 代表

養父 信夫 先生

平成30年12月8日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

宗像鯨の会 代表 養父 信夫（ようふ のぶお）



1. 経歴

1962年 6月22日、福岡県宗像郡大島村に生まれる。玄海町（現宗像市）で幼少を過ごす。

1986年 九州大学法学部法律学科卒。同年（株）リクルート入社。

1998年 独立し都市と農村をつなぐグリーンツーリズムを広げる活動を開始。

“悠々とした地域生活の総合誌”「九州のムラ」の発行にたずさわる。現在同誌編集長として、地域に生きる人々の暮らしを中心に取材を重ね、「九州のムラ」を通じ、ムラとマチを繋げる。講演や地域づくりのアドバイザーなど、グリーンツーリズムやスローフード運動の啓蒙活動も積極的に行っている。“ムラガール”の名付親。

2. 現在担当している委員、役員など

地域力創造アドバイザー（総務省）

内閣官房 地域活性化伝道師

九州のムラ市場、九州ムラコレ市場 企画・立案者

トヨタ自動車「Gazoo Mura」プロジェクト 企画・立案者

九州地域六次産業化推進会議専門委員

六次産業化 ボランティアプランナー

九州産業大学芸術学部講師「ムラをデザインする」

宗像国際環境会議 事務局長（中高生向け「育成プログラム」含む）

一般社団法人九州連携機構 設立発起人 理事兼会長補佐

九州ツーリズム・コンソーシアム（九州ムラたび） 副会長

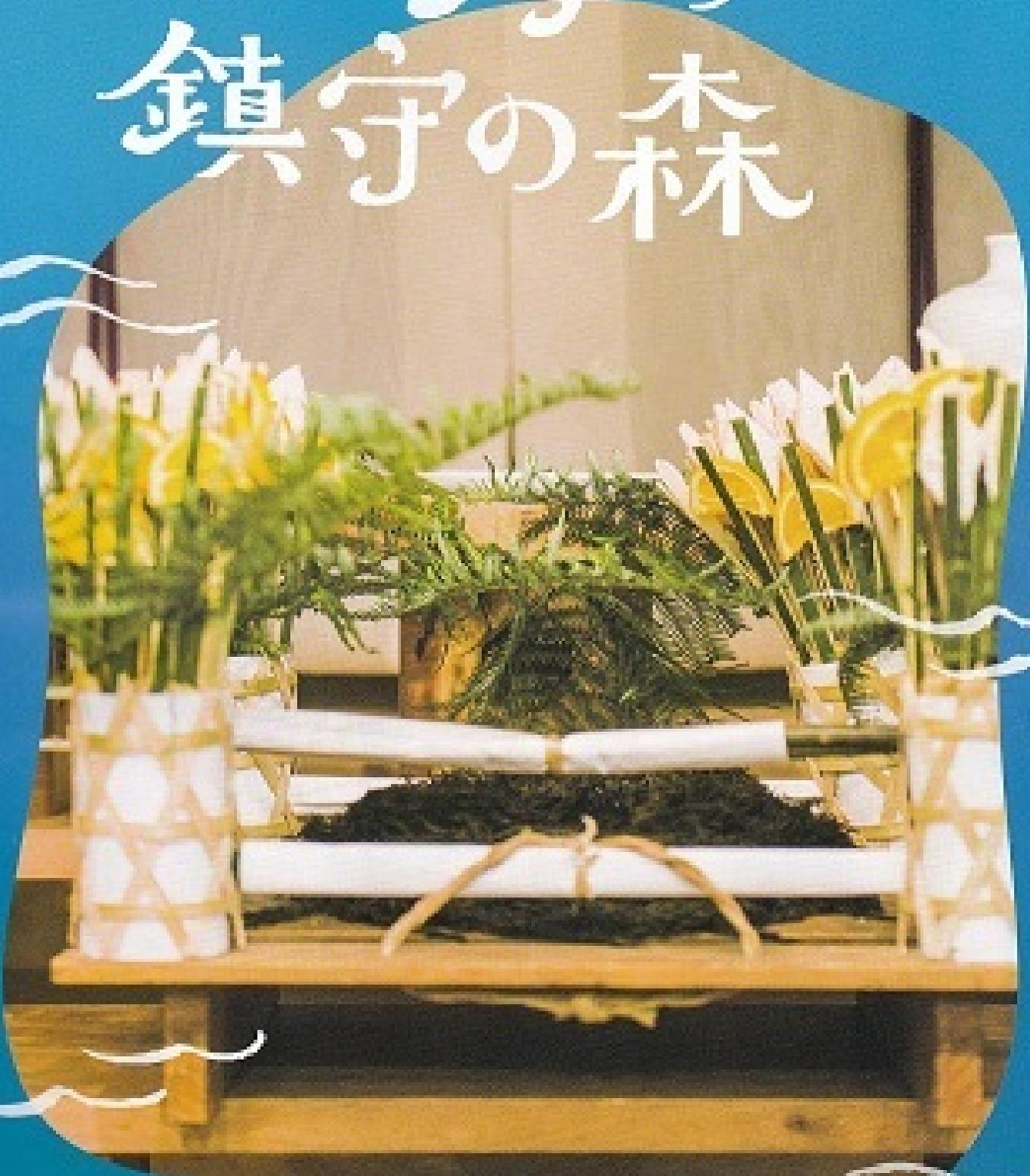
一般社団法人九州のムラ 代表理事（「Nippon ノ MURA」発行編集人）

3. 受賞

グリーンツーリズム大賞2007特別賞受賞

宗像の
森里川海

海の 鎮守の森



【宗像大社 法式祭】

宗像大社は神宮である筑前県豊前市約200年前に創建された。当時の
海沿いにある港口の鎮守社として「アハサキ」(カンゾウ科の草花)も、
中津城の惣門からは「九郎原(くさむら)」(唐松科の松葉の一種)など
特産の民間を神前にお供えし、神饌と御札を共に授け



鐘崎海女 北川千里さん

「若い時に潜りよった時の海と、今の海は全然違うよ。
水温がどんどん暖かくなって、濁っとる感じやね。
昔は、潜りよったら魚が寄ってきて一緒に泳いどったけど、
最近じゃ全然見らん。ちょっと寂しいね。」

「魚がおらんくなって、たて綱もするところもなくなったね。
わかめも形が変わって、加工の時に溶けるんよ。
本当はもう少し太ったわかめが育って欲しいんだけど、わざと獲らんようにしてる。
でもまだ鐘崎はいい方やね。となりの海ではウニも獲れなくていいよる。」

「もう76歳になりました。最近ちょっと病気になって潜れんけど、
春にはまた潜りたいね。潜っとった方が体の調子がいい。」

「何人か海女さんになりたい女性が来たけど、続かんのよね…。
特に後継者が欲しいというわけではないけど、海が好きで、
海を大切にしてくれるような海女さんやったら大歓迎やね。
そんなもの好きな人がおればいいんやけど（笑）」

海の 鎮守の森構想と 宗像の 森里川海

九州大学工学研究院 環境社会部門 准教授 清野 聡子さん

釣川がつなげる 宗像の森里海の暮らし

玄界灘からの冬の強い季節風。対馬暖流の海と陸の森からの恵みの出会い。釣川や背後の森からの地下水。海の中の春は陸よりも早い。

陸がまだ底冷えを感じている時期に、少しずつ春へと向かう陽光が海中に射し込み、藻類が伸び始める。

玄界灘からの冬の強風は、海を揺り混ぜ、海岸にも海面にも白波を立てている。名物の季節風は、充分に酸素を含んだ水を海中に行き渡らせているのだ。

砂浜に打ち上がったホンダワラ類の海藻は、磯や海底の岩に根付いて生育していたものだ。成長するほど、海の流れの方を受けやすくなり、いつか剥離して漂っていく。海藻の浮き袋は、流れ藻となって、海岸で海藻の体に蓄積された栄養分を、外洋へと運ぶ力となる。

流れ藻はモジャコというブリの稚魚などが集まり場となる。それを狙って流れ藻に寄ってくる魚ふくめ、流れ藻生態系は小宇宙となり、対馬暖流に乗って北上していく。

宗像を移転する山々からの土砂を運び、平野や砂浜を地質学的時間をかけて作ってきた釣川。宗像市民に飲み水を供給し、農地を潤し、工場を支えてきてくれた川。局所的な大暴れをして災害を起こすこともほとんどないため、身近にありながら忘れられた川。

ハードユースされながら静かに水をたたえている。今や遊ぶ人の影も少なく、流ってきたかまたちが水面に模様を描いている。

この川は住みやすい宗像の人口増や産業発展のために、考え得る限りの取水がなされている。「川の流れ」が見えるほど速くないのは、河川流量が減って、堰で仕切られた細長い池となったからなのだ。ここに流れらしい流れが見えるのは、大雨の時くらいである。

ところが、釣川には40年ほど前に環境をめぐるドラマがあった。高度経済成長期に排水が流れ込んで水質悪化した時、宗像の市民たちが立ち上がった。あらゆる努力をして水を飲める水質レベルまで改善したのだ。

森里川のつながりを考える機会に、是非とも、釣川の静かなる恵みに思いを馳せたい。

昭和58年、宗像でまだ上下水道の整備がしっ
かりと行われていない時代。合成洗剤による釣
川の汚染が問題になっていた。当時高校教師
だった福島さんは、その問題を解決すべく、合
成洗剤から石鹼に変えようという運動。釣川浄
化運動に参加していた。この活動を次世代に続
くよう、福島さんは、平成3年にひなかつ「水
と緑の会」を設立する。

ひなかつ「水と緑の会」は、水辺の学校として、
毎年約28回、宗像市内のすべての小学四年生約
800人に課外授業を行っている。釣川は、宗像
で唯一の水源地である。その大切な川の源流があ
る森や川に生息する生物、森と川と海の関係な
ど、釣川というフィールドで「水」をテーマに
した環境学習を行うことにより、森と川、そし
て海へと繋がっていくことを子供たちに伝えて
いく。そこから、里山に暮らす人々の関わり方
が見えてくる。今では受講した子供達が親にな
り、かれら子ども達が福島さんの課外授業を受
けている。

福島さんは、釣川付近に生息するホタルを守
り、育てている。一般的に、町の中の川は、川
岸と川底をセメントで固めて放水路にしている
ため、ホタルが生息できない。ホタルが生息し
ていくためには、川の水が綺麗なことはもちろん、
水深や水流、川辺の土の状態など、条件はいく
つもある。

ホタルの館を拠点に、ホタル調査や幼虫の飼
育と放流、ホタル数の調査や分布マップづくり、
そしてホタルが生息できるような環境づくりを
行っている。

「釣川の水質改善と併せて、この活動を行うこと
で、ホタルの数と生息場所も年々増えています
ね。ホタルが見れるということは、川が豊かだ
ということです。」

しかし現時点で釣川の本流域のホタルは少
ない。

「もっと人日につき場所が生息できるよう、ホタ
ルが日常的に人々の目に触れるように活動を続
けていかなければなりません。そのことが環境



フィールドは
宗像の森里川海

地域の子どもたちに 水の循環を伝える

ひなかつ「水と緑の会」会長 福島敏満さん

保護に繋がりを、私たちの生活に直結していくと思います。』

近年、太陽光発電、メガソーラーの開発が盛んに行われている。太陽光発電は、資源を使わずクリーンにエネルギーを生み出せる方法として注目されている。しかしメガソーラーを設置するにあたって、福島さんは危惧していることがあるという。メガソーラーを設置するためには、広い土地が必要となる。最初は空き地などを利用していたが、山を切り開いている現状がある。メガソーラーの施設は、宗像市の面積の1%になるという。また、人手が入らなくなった山に大雨が降ったときに流れ出る土砂を止めるため、また人が歩きやすいようコンクリートの道を造成することにも疑問を感じている。

「作るのはいいいですが、その後ほったからしなんですよね。雨が降れば劣化していくし、草も生えてくる。そしてまたコンクリートで舗装していく。メガソーラーも心配ですね。私は、人間が一度手を加えた自然は、ペット同様、最後

人間が一度手を加えた自然は ペット同様、最後まで 面倒を見る覚悟が必要なんです



3

1. 宗像市たるとの里公園にある「ホケムの館」が福島さんの活動拠点 2. 福岡県森林環境税を使って約川の上流域の森林を整備 3. 「後継者をどう育てるかが次の課題」と語る福島さん 4. 宗像国営育成プログラムでは約川の源流から河口域の海岸までを巡る

1



2



4



まで面倒を見る覚悟が必要だと思っています。』

宗像には、海があり、山があり、川があり、田んぼの風景がある自然豊かなところである。その豊かな自然を求め、永住の地として選ぶ人々が沢山いる。福島さんはそれを後世に残したいと考えている。

活動を初めて30年。この活動を終わらせるわけにはいかないという想いは強い。沢山の専門家の力を借り、活動の幅を拡張、新たな人材の発掘を行っている。

「宗像は自然と人が共存できる可能性を秘めています。うまくいけば日本のモデルとなります。そういった意味でも、活動を行う価値があると思います。宗像には環境に対する意識が高い人が集まってきているし、それを伝えていく。やっていることは30年前とあまり変わらないですが、自然も人も徐々に改善していければいいですね。もし、これ以上自然破壊が進んでいったとしたら、次世代の子供たちに、父ちゃんたちが何もせんかったけん、こんななんやねっていわれますよね(笑) そんなことを言われないうちに頑張っていきます。』

山を守り、海を守る

竹魚礁を活用した 「豊かな海づくり ～Project-T」

余すことなく、無駄を無くし、
すべてを循環させる

福岡県立水産高等学校
アクアライフ科

福岡県福津市津屋崎町（旧 宗像郡津屋崎町）にあり、漁港に囲まれた学校、福岡県立水産高等学校。そこにアクアライフ科という学科がある。今から7年前、日頃からお世話になっている漁師、漁協の方々へ何か学校からお返しできないかということからこの活動が始まった。

海のためにできること。海が行われているなら掃除をすればいいのか…。漁獲量の減少が問題ならば、船臭を放流すればいいのか…。悩む生徒たちに、アクアライフ科主幹教諭・大山欣丈さんはこう伝えたという。「海だけ見ても海はよくなる。山と海の関係を知ることが重要だと生徒たちに教えました。そこから山の竹に注目

しました。とにかくやってみよう、やってみないと何も始まりません。Think Globally, Act Locally」

竹林を綺麗にし、山からの流れ出しを改善すれば、海にいい影響が出るのではないかと、アクアライフ科の生徒たちは「竹」に焦点を絞った。竹を伐採するだけではなく、その竹をどう活用するか。使い方、加工方法によっては、うまく海と山の循環の中に竹を活用できるかもしれない。こうして「豊かな海づくり～Project-T」は発見した。海の磯焼けが広がり、海水温の上昇している現状。海と山は繋がっている。森山を豊かにすれば海も豊かになる。アクアライフ科の生徒たちの挑戦が始まる。

まず最初に考えたのが、養殖跡の浄化の素材として竹炭をつくること。炭焼きも生徒たちと一緒にやった。竹炭を作るには時間も労力もかかる。

そして、山からの流れ出しから生まれる栄養分として、竹炭と腐葉土、鉄くずを固めたおにぎりのようなものを作り、磯焼けの海にいれていった。そうすることで、山からの流れ出しである栄養分の補いを考えた。

次に考えたのが、塩づくり。水産高校のある津屋崎には昔、九州一の塩田があったという。津屋崎は塩で栄えた町。その歴史を復活させたいという気持ちから、竹を使った塩づくりが始まる。煮詰めるための燃料は竹。燃やして出た灰を、





参加者の作った10基の竹魚籠を一つ一つ設置する水産高校の生徒たち



1



2

3



1.生徒たちと一緒に汗をかく、アクアライフ科の大山敦史教師 2.竹魚籠を設置した海浜は、一度がアマモが広がる草原のよう 3.夏に開催された国際環境展100人会館の種場でフィールドワーク参加者

わかめに活用し、灰わかめを作った。他にも竹皮パウダーを使った石鹸や、竹の移動用エコラントなども手がけた。

そして竹を使った魚籠づくり。最初は竹を束ねて沈めていた。しかしそれだけでは海の中で倒れてしまったり、枝葉が腐り枯れていった。そこで考えたのが竹をドーム型にすること。この場合、潮の流れや波の影響を受けづらくなった。そこに魚の群れや産卵が見られたという。「そこに海藻がついたり、もっと魚が噛み合えばいいですね。海の森になればいい」と生徒たちと考えています。無駄を出さず、すべてがうまく噛み合うといいですね。」

厄介だった竹を、人の手で、有効活用し、

自然に還していく。「余すことなく、無駄を無くし、すべてを循環させる」という水産高校の生徒たちの新しい発想である。

この取り組みも、ようやく地域の漁師さんたちにも認識されつつある。「最初は、海にものをいれるわけですから、あまり理解が得られませんでした。しかし、生徒たちと一生懸命活動している姿を見てもらって、徐々に協力していただけるようになりました。簡単な話ではないですが、もっと漁師さんたちと協力してこの活動を行っていきたいです。」

この活動が始まって7年が経つ。始まりは、この活動が始まる前の三年生の生徒たちだったという。

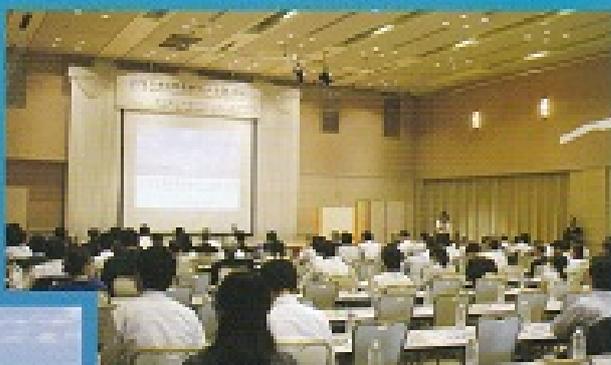
「当時の三年生がこの料を盛り上げてく

れました。その生徒たちのおかげでこのように活気ある活動が7年も続いたんだと思います。」

水産高校の生徒たちの活動はまだまだ続く。津屋崎の海では、5年ぶりにウミガメの産卵も確認され、着実に海の環境はよくなってきている。

「この活動は、緊いできなければなりません。しかし水産高校の生徒たちでは、授業などもありますし、限られた範囲でしかできません。とても小さな活動だと思っています。しかしこのような活動が日本全国また世界に広がるが各地の海で行えば地球の海は綺麗になる。そんな夢を生徒たちと思い描いています。」

宗像国際環境100人会議・ 宗像国際育成プログラム



海の環境問題を解決するための 実践型フォーラムと次世代の 国際人を育成するプログラム

宗像国際環境会議実行委員会は、“海の領守の森”情熱を掲げ、海苔などが枯れていく“磯焼け”問題や海岸に流れ着く漂着ゴミなど海の環境保全に取り組むために、地元宗像の環境、観光、地域づくりに取り組む団体と、環境に意識の高い民間企業、それに大学研究者、自治体などで構成される組織です。宗像は、太古より海を介して大陸との交流の歴史を持った、世界に開かれた地域です。その歴史は宗像大社を中心とした「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群からも経解くことができます。その昔、宗像海人族と呼ばれた宗像三女神を祀る宗像の民たちは、海からの恵みで生きてきた漁師でもあります。その末裔たちは今もなおここ宗像で海とともに生きています。宗像の漁村の一つ、壱岐という集落は海女の発祥の地です。

海の砂漠化、磯焼けが進む海にはアワビ、魚も獲れなくなってきています。一朝一夕には環境問題は解決できませんが、何もアクションを起こさなければ、そのツケは次世代に重くのしかかっていきます。宗像国際環境会議実行委員会は、過去2回、宗像で開催された環境の国際会議で提言された“Think global, act local”の“行動する”組織として海の環境保全のため、動いていきたいと思っています。今はイベントとして、毎年夏の3日間、「宗像国際環境100人会議」を開催し、海の環境問題について解決策を協議したり、実際にフィールドに出て、竹魚籠を作って海に沈めたり、漂着ゴミを拾ったりと企業、市民の皆さんと一緒に取り組んでいます。また地元宗像の中高生を対象に、「宗像国際育成プログラム」というグローバルな視点を持った人材育成のための教育プログラムも年に8回程度実施しています。宗像の海の環境は、そこに注ぐ約川の上流域の森や、里山の環境にも目を向け、さらには海で繋がる隣国の環境意識もともに高めていかなければなりません。まずは出来ることから私たちと一緒に始めてみませんか。

宗像国際環境会議実行委員会
事務局長 委父 信夫(一般社団法人九州のムラ代表理事)